

社説

血液製剤もあなたの献血で

病氣やけがをした時には、輸血が行われ、昔は採血した血液をそのまま患者の体内に送り込んでいた。今は必死に応じて血液の成分を分けて使う。

血液(けっしゆ)、赤血球、血小板。これらは輸血に使用されるが、決して有効なことがわかってきた。血液からは、血友病にかかせない血液凝固因子製剤、や腎臓病にかかせないアルブミン製剤、感染症に効く免疫グロブリン製剤が作られる。これらを血液成分製剤と呼ぶ。

輸血用の血液は何かと國內の献血でまかなっている。が、血液成分製剤まで手が回らない。九〇%以上はアメリカの売血などに依存している。汚染された血液凝固因子製剤で、千人を超えるエイズの感染被害を招いたことば、赤々たる事実だ。

厚生省の新しい血液製剤推進検討委員会は、この血液成分製剤も國內献血でまかなう方針だ。

中には、輸血製剤の半額といふものもある。「この製剤が採用されると、使用する血液は、輸血も輸入する。まじか。」

次に、原料となる血液の確保のため、献血を勧めてはならない。血液凝固因子製剤の確保だけでも、新たな年間約五十万リットルの血液が必要だ。六十三年度の献血による原料血液供給量は二十万リットルから、このために、輸血の量を大幅に増やし、若い人たちが献血しやすい場所を設ける必要がある。職場や学校の協力も大切だ。みんなが力を合わせる。

現在は、百CC採血が主流だが、少数派の増やしたい。出願採血の量を大幅に増やせば、若い人たちが献血しやすい場所を設ける必要がある。職場や学校の協力も大切だ。みんなが力を合わせる。

「第二次交通戦争」を阻止しよう

全国の交通事故による死者が、九月に入り七千人を突破した。この数字は、十三年ぶりに犠牲者が二十万人を超えた昨年より、さらに早いペースである。このペースを、今年も維持し、死者を減らさなければならぬ。

二、七、八百人にのぼる。警察庁では、死者を増やしている。この十五年間で、死者は三十九万人を突破し、そのうち、自損車事故が三十一万人を突破している。これは、交通戦争の激化を示している。

死者は三十九万人を突破し、そのうち、自損車事故が三十一万人を突破している。これは、交通戦争の激化を示している。

四回CC採血を増やしていく方法もある。また、血液は採取する「成分採血」を増やして必要だ。通常の四回CC採血では、血液は百六十CCしか採れないが、この方法を、従来の四回CC採血と比べると、採れる血液の量は二倍になる。この成分採血は、赤血球を体内に戻すので、一時は採血の間隔を短縮する技術開発も必要だ。

血液を輸送する部分が、輸血の輸血を減らす必要がある。また、外国からの買血は一日も早く始めるべきだ。ただ、公費化は是非厳格にふたをかけるべきだ。主体となる日本の責任は重く、責任を負わなければならない。

また、四輪車と二輪車が一緒になって走り回ると、激しい道路環境の中で、クルマ社会の一員として働かざるを得ない高齢者が、運転を切り切れない状況がある。

今年前半の死亡事故の特徴をみると、自動車、バイクに乗車中の死者が増え続け、それに加えて自転車利用者や歩行者の犠牲者が増加傾向を続けている。

中では、早くして、六十五歳以上の若年層の死者が増えている。高齢者の死者は全体の三割を占め、歩行中、自転車

利用中の犠牲者は、半分近くが高齢者でもあり、昭和四十五年頃の「第二次交通戦争」の犠牲者は、子供たちの犠牲者が目立っていた。が、いまでは、お年寄りが交通事故の犠牲者といえる。

「第二次交通戦争」が、お年寄りが交通事故の犠牲者といえる。その被害は、クルマ社会がかかえているという点で、警察が対策を講じている。対策は、何となく、好ましくない。一番の理由が、何となく、好ましくない。対策は、何となく、好ましくない。

また、四輪車と二輪車が一緒になって走り回ると、激しい道路環境の中で、クルマ社会の一員として働かざるを得ない高齢者が、運転を切り切れない状況がある。

今年前半の死亡事故の特徴をみると、自動車、バイクに乗車中の死者が増え続け、それに加えて自転車利用者や歩行者の犠牲者が増加傾向を続けている。

中では、早くして、六十五歳以上の若年層の死者が増えている。高齢者の死者は全体の三割を占め、歩行中、自転車

昨年より一五%も増えている。この効果的な対策は、ぜひ、実行しよう。

今年の「交通安全白書」は、「第二次交通戦争」の兆しを警告した。しかし、「第二次交通戦争」は何となく、好ましくない。対策は、何となく、好ましくない。対策は、何となく、好ましくない。

また、四輪車と二輪車が一緒になって走り回ると、激しい道路環境の中で、クルマ社会の一員として働かざるを得ない高齢者が、運転を切り切れない状況がある。

今年前半の死亡事故の特徴をみると、自動車、バイクに乗車中の死者が増え続け、それに加えて自転車利用者や歩行者の犠牲者が増加傾向を続けている。

中では、早くして、六十五歳以上の若年層の死者が増えている。高齢者の死者は全体の三割を占め、歩行中、自転車